

アメリカの服飾における都市とメディアの影響 The Influence of Cities and Media in the American Clothing Life

太田 茜^{*1+}, 川久保 亮^{*2+}, 堀 麻衣子^{*3+}
Akane Ota^{*1+}, Ryo Kawakubo^{*2+}, and Maiko Hori^{*3+}

*1 日本女子大学大学院 東京都文京区目白台 2-8-1

Japan Women's University

2-8-1, Mejirodai, Bunkyo, Tokyo, Japan

*2 立教大学

Rikkyo University

*3 目白大学短期大学部

Mejiro University College

+服飾文化共同研究拠点、文化ファッション研究機構、文化学園大学

Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture

Bunka Fashion Research Institute, Bunka Gakuen University

Abstract : The purpose of this study is research how cities and media influence in the American clothing life. We researched American magazines housed Bunka Gakuen Library and New York Public Library. From the result, a lot of clothing company set up shops at Fifth Avenue and Seventh Avenue in Manhattan. Made-to-order shops were at the Fifth Avenue, ready-made clothing shops were at the Seventh Avenue. Women's magazines covered many topics, the latest fashion from Paris and New York, and what to wear. Often women's magazines gave a detailed description how to wear clothes, how to get clothes, how to treat clothes. Readers who arranged their clothes by home sewing leaned sewing techniques from magazines' articles.

Therefore, cities affected where clothing companies set up shops, women's magazine had influence on the clothing life.

要旨: 本研究の目的はアメリカの服飾において都市とメディアがどのような影響を与えているかを明らかにすることである。資料には文化学園図書館をはじめ国内に所蔵されている婦人雑誌を使い、不足する分についてはニューヨーク公共図書館所蔵の雑誌資料を用いた。

ニューヨークでの現地調査と雑誌に掲載された広告から、ニューヨークでは5番街と7番街に衣料品店が存在していたことがあきらかになった。特に5番街には注文服の店が、7番街には既製服の店が集中しており、それはニューヨーク市の道路整備の影響であることがあきらかである。

婦人雑誌の誌面はパリやニューヨークの最新流行を伝えるだけでなく、どのような服を着るべきか、どこでどのように服を手に入れるべきか、手に入れた服をどのように手入れするべきか等多岐に渡る内容を細

*1) m1053001oa@gr.jwu.ac.jp

かく伝えている。さらに家庭裁縫で自分たちの服を整える読者たちは、雑誌記事から裁縫の技術を学んでいた。

アメリカの服飾産業は都市部特有の住み分けがなされ、また雑誌によって読者の衣生活は大きな影響を受けて形成されていったといえる。

配当決定額

平成 22 年度	500,000 円
平成 23 年度	500,000 円
合計	1,000,000 円

研究の目的

アメリカにおいて、都市とメディアの関係が服飾にどのような影響を与えたかを雑誌を主な資料として研究する。これまでのアメリカの服飾研究は既製服についての研究が中心であり、その発生と発展については多くの研究が行われている。しかし既製服以前及びアメリカにおいて服飾がどのように捉えられているかはあまり研究されていない。また、雑誌等から行われる研究については特定の雑誌を資料とした研究は行われているが複数の雑誌を横断的に資料とするものはなく、雑誌により伝えられる情報がどこから発信されているものかに着目した研究は行われていない。そこで衣服を手に入れ、着るという行動に焦点を当てる際に元になる情報がどこにあり、どう発信され、実際の行動にどう影響していたかを分析することとした。

このようなメディアによる流行や風俗の形成が現在の衣生活の原型のひとつとなっているという仮説の元に考察を行った。

研究の方法

文化女子大学所蔵の 19 世紀末から 20 世紀前半に刊行された雑誌を調査し、分類と服飾に関する記事の分析を行った。雑誌は婦人雑誌を中心とし、実際の読者が着ていたと考えられる婦人服と、読者が選択・購入を行っていたであろう子ども服を中心に分析を行うこととした。また、メディア史のアプローチから個々の雑誌の読者がどのような人々であるかを考察し、実際のアメリカの服飾と衣生活について検討した。

さらに日本国内の他機関に所蔵されている雑誌資料や、ニューヨーク市立図書館の雑誌資料で国内に所蔵されていない雑誌資料を調査した。

研究の実施計画

[22 年度]

文化女子大学所蔵のアメリカの雑誌をリストアップし、その雑誌の概要と服飾に関する記事についての調査を行った。この予備調査の結果を踏まえて国内の他機関に所蔵されている資料と、日本国内に所蔵されていない資料のうち研究に必要なものをリストアップし、国内の他機関に所蔵されている資料は 22 年度及び 23 年度で閲覧に行き、調査を行った。

また、国内に所蔵されていない資料についてはアメリカに行き調査を行った。調査はファッション誌の

他に婦人雑誌の中で生活の状況が伺えそうなものを対象とした。

[23年度]

去年度に収集した資料を整理・分析し、雑誌ごとに読者層の分析とどのような衣生活を送っていたかを明らかにするとともに、ニューヨークの街自体がどのように構築されていたかについて現地の調査と考察を行った。

分析の際にはその資料が扱っている衣服がどのような入手方法であり、どのような時と場所でどのような人が着るかということと共に、ものの移動・人の移動に着目する。鉄道及び地下鉄の普及がどのように行われたかを元に、ものと人の移動を分析する。

成果発表として日本家政学会第63回大会にてポスター発表を行った。また、課題の総括として研究会の開催を行う。

研究の成果

1. 雑誌分析による各雑誌の概要

文化学園図書館所蔵のアメリカで発行されていた雑誌は比較的年代の新しいものが多く、*Vogue* や *Harper's Bazaar* も実物資料は抜けが多いことが分かった。また、国内のアメリカ研究が盛んな大学の図書館には若干婦人雑誌が資料として所蔵されているが、*Vogue*, *Harper's Bazaar*, *Godey's Ladies Book*, *Ladies Home Journal* といった代表的な雑誌が重複して所蔵されている状態であり、アメリカで婦人雑誌の中でも発行部数の多いもののうち、上記以外の雑誌は所蔵されていないのが現状である。

ニューヨーク市立図書館に所蔵されている雑誌資料は上記の雑誌以外にいくつか婦人雑誌が所蔵されていた。それぞれの概略と傾向を以下に述べる。

Vogue 現在はハイ・ファッション誌として発行されている雑誌。1892年創刊で、もともとはニューヨーク社交界の情報誌として創刊された。読者は上流階級のみであり、掲載されている広告も高級なものばかりである。

Harper's Bazaar 当時ハーパース社が発行していた絵入り新聞「ハーパース・ウィークリー」ファッション版として1867年に創刊された雑誌。誌面には社交界の記事も掲載され、読者層はやや上流の中産階級だと推測される。

Godey's Ladies Book アメリカで最初の婦人雑誌として1830年に創刊された雑誌。実用・教養・娯楽という三つの要素で婦人雑誌を構成し、以降発行される婦人雑誌の原型をつくったとも言われている。読者層は中産階級を中心とした幅広い女性である。

Ladies Home Journal アメリカの婦人雑誌として最多部数を誇っていた雑誌。1883年創刊であり、読者層は幅広く、購読料も安く設定されている。安い定期購読料金で読者を増やし、娯楽、教養、実用の3本立てで構成され、1893年には売薬広告の掲載を拒否するなど中流階級の良心に訴える誌面をつくった。

McCall's Magazine 型紙メーカーであるマッコール社の月刊誌。前身は1873年から発行されている *The Queen: Illustrating McCall's Bazaar Glove-Fitting Patterns* であり、その前に発行されたバタリック社の雑誌に対抗する形で創刊された。誌面は自社パターンの紹介以外にファッションや家庭経営の記事が掲載され、婦人雑誌として編集されている。

Butterick Quarterly 1907 年創刊。型紙メーカーであるバタリック社のカタログ兼季刊誌。バタリック社のパターンがイラストとともに紹介されており、着る年齢層や用途、使う布や用布量等と共に記述されている。バタリック社の刊行物にはカタログと別に *The Delineator* という月刊誌があり、*McCall's Magazine* はそれを意識して創刊されたと考えられる。発行されていた時期は定かではないが、このタイトルで発行されていたカタログは 1931 年ごろまで確認できる。

Housewives Magazine 1909 年創刊の月刊誌で、発行元はハウスワイブス・リーグ・マガジン社。雑誌のタイトル通り主婦のための雑誌であり、家政全般についての記事がみられる。誌面のほとんどは家事に関する記事であり、服飾の記事も流行よりは実用面が重視されている。1918 年廃刊。

THE MODERN PRISCILLA 1887 年創刊の月刊誌で、"Ladies' work and Ladies' pleasure"をうたい文句に発行されている。手芸に関する記事が多く掲載され、レースによる装飾を多数紹介している。レースはバツテンバーグレースやアイリッシュレース、タティングレース等が掲載され、レースのパターンの広告記事も多数掲載されている。

これらの雑誌は詳細な発行部数等の情報がないのが現状ではあるが、*Ladies Home Journal* などの婦人雑誌に比べると *Vogue* や *Harper's Bazaar* の発行部数はごく少なく、1930 年代でも十分の一程度であったことから婦人雑誌の記事の方がより多くの読者に読まれているという点で影響力が大きかったと考えられる。

2. 教材としての雑誌の役割

対象とした婦人雑誌及びファッション誌には流行を伝えるだけでなく、家庭裁縫をはじめとする家事の教材としての役割も果たしていた。

たとえば *Ladies' home journal* には図 1 のような "The Girl Who Makes Her Own Clothes" という少女向けの裁縫記事が複数回掲載されていた。これは、家庭において少女が自身の衣服をつくるための記事であり、「身頃を裁断する」「襟とカフスを作る」「ビショップスリーブを作る」などの各項目に分かれ、ドレスの製作過程を詳細に説明している。少女向けとする裁縫記事を掲載していることから母と娘とでこの雑誌を読み、ゆくゆくは娘が結婚し家庭を持った際に新たな読者になるといった狙いをもってこの記事が連載された可能性もうかがえる。

また家計の節約の記事がほぼすべての婦人雑誌に掲載されており、その一環としてドレスの作りなおしや着まわしのきく服、生活に必要な衣類とその必要数等の提案の記事や図 2 のような被服費についてなどの記事が掲載されている。このような工夫は経済的な必要性に迫られて行われていたのであるが、その際の教材として雑誌はひとつの役割を果たしていたといえよう。



Fig.1 The Girls Who Makes Her Own Clothes (Ladies Home Journal Oct.1910) 少女向けの服づくりの記事

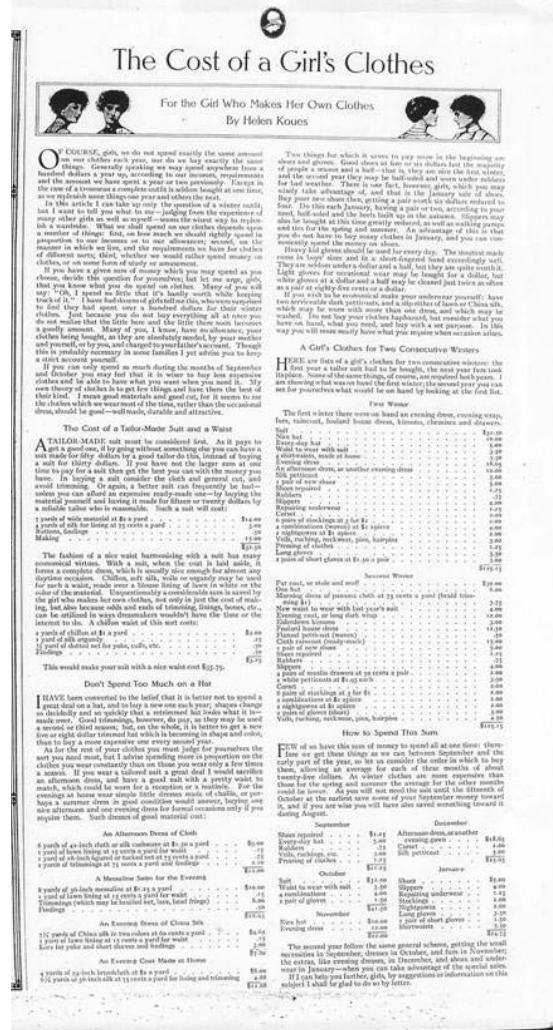


Fig.2 The Cost of a Girl's Clothes (Ladies Home Journal Sep.1910) 被服費についての記事

3. 都市の影響

現地調査と雑誌広告の分析の結果、ニューヨークのマンハッタン島内では19世紀から5番街と7番街に服飾店が集中していることがわかった。具体的には5番街には注文服等の店舗が、7番街には既製のメーカーが集中しており、現在のファッション・アベニューと呼ばれる地域と一致している。

ニューヨークは1811年にグリッド状に街の整備が行われ、1904年に地下鉄が開業しインフラが整った都市である。また、移民の多くはそれぞれかたまって住んでいることが多く、特に服飾業への関与が高いドイツ系やイタリア系移民が多く住んでいた南東地区には裁縫場や繊維関連の倉庫が集中していた。ここから布地や副資材が主にブロードウェイを通過して北へ運ばれ、やがて彼らが縫製工場の火事等を経て北へ移り住むに従って7番街周辺の区域へ進出していったといえる。また、5番街はそれより北側の地区に住む注文服店の顧客がアクセスしやすい場所であったことから7番街との住み分けが自然に行われるようになったといえる。

Table.1 Affairs of New York City ニューヨーク市の主な出来事(部分)

1898 年	5 区からなるニューヨーク市が成立
1902 年	フラットアイアン・ビルが五番街に建造
1903 年	ウィリアムズバーグ・ブリッジ開通
1904 年	最初の地下鉄が開通
1904 年	ニューヨーク・タイムズの本社が 42 丁目に移転(タイムズ・スクウェア誕生)
1904 年	イーストリバーで蒸気船ジェネラル・スローカム号炎上(ドイツ系移民が多く亡くなる)
1905 年	南アフリカの金融再建のためイギリスがニューヨーク証券取引所に多額の借金、世界金融の中心がニューヨークへ
1909 年	マンハッタン・ブリッジ開通
1910 年	ペンシルヴァニア駅完成
1911 年	トライアングル・シャツウエスト工場火災
1923 年	グランド・セントラル開業
1924 年	1924 年移民法(ジョンソン=リード法)によりヨーロッパ移民の減少、代わりに南部よりアフリカン・アメリカンが移動, ハーレムの形成

4. 講演会開催

研究の総括として 2012 年 3 月 5 日に大阪樟蔭大学教授北山晴一氏、共立女子大学教授生井英考氏をスピーカーとして講演会を開催する。講演会のテーマは「服飾/メディアと都市生活 ―都市の生活における服飾とメディアの一関係」とし、両氏に講演をしていただき、ディスカッションを行う予定である。

主な発表論文等

[学会発表]

堀麻衣子、太田茜、川久保亮「20 世紀初頭の婦人雑誌にみる子供服」第 63 回日本家政学会(2011)